



昭和十三年九月改訂版

八
戸
港
大
觀

八
戸
市
役
所

八
戶
港
大
觀

八戸港大觀目次

一、緒言	一
第一章 沿革	
一、八戸港の沿革	二
第二章 漁港	
一、漁港修築の經過	三
二、漁港の修築工事概要	六
一、北防波堤	
二、船入場防波堤	
三、魚揚場	
四、魚市場上屋	
五、臨港鐵道其の他の施設	
一、漁港としての現在	八
一、外港漁況の盛況	
二、内港湊川の盛觀	
三、在籍漁船數並に漁港入港數と水産製造加工高	
四、重要漁場との關係	
五、交通機關並に重要都市との連絡	
六、漁獲物處理機關	
(イ) 魚市場	
(ロ) 製氷冷蔵其の他の機關	
(ハ) 水産物加工機關	
(ニ) 漁船必需品供給關係並に船體修理機關	
(ホ) 其の他の施設	
一、漁港としての將來	一九
第三章 商港	
一、商港修築の經過	二一
一、商港修築工事概要	二三
一、計畫の方針	
二、計畫の説明	
(イ) 北防波堤	
(ロ) 浚渫及埋立	
(ハ) 假防波堤	
(ニ) 繫船岸壁	
(ホ) 物揚場	
(ヘ) 假護岸	
(ト) 上屋	

(チ) 鐵道及道路

(リ) 荷役能力

一、商港としての現在……………

二七

一、八戸港入港船舶數及移出入貨物數量價額

第四章 第二種重要港灣としての八戸港

一、重要港灣に選定の理由

二、本港の優越せる事項

三、商港第二期修築計畫並に將來の擴張と其の水面積

第五章 工業港

一、工業港と其の實現……………

三六

第六章 本港の後方地帯と産業

一、本港の後方地域

二、後方地域に於ける主なる産業

第七章 將來の八戸港

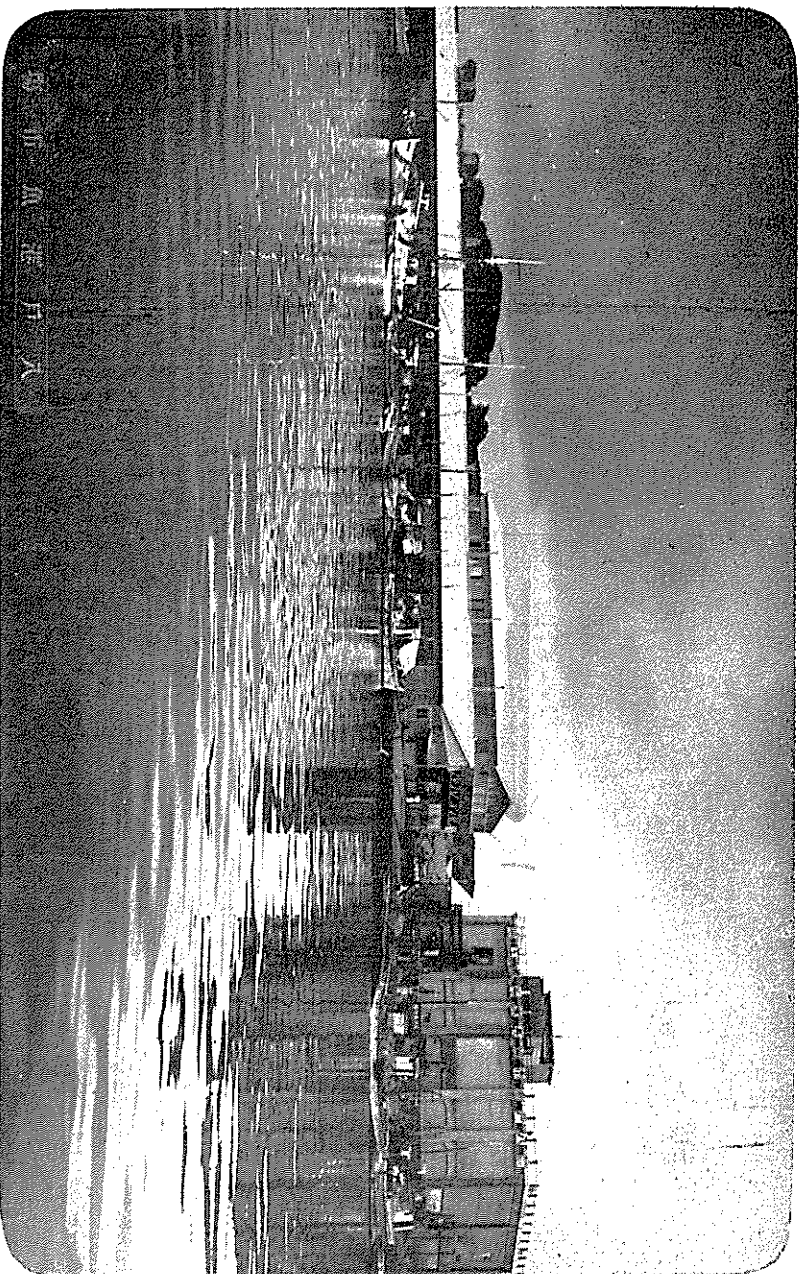
一、本港の將來と其の使命……………

四七

一、東北振興と本港の修築……………

四八

(附) 八戸港氣象調



—— 庫藏冷水製屋上地立埋 ——



八戸魚市場上屋



湊川の輻辳

八戸港大觀

緒言

第二種重要港灣、八戸港を海陸連絡の關門とせる八戸市は青森縣の東南部に位し、東經百四十一度三十分、北緯四十度三十分、太平洋に面せる新興都市にして、昭和四年五月一日舊八戸町、小中野町、湊町、鮫村の三町一ヶ村を合併して市制を敷き、現在戸數一〇、四七九、人口六一、五六四を有す。(十二年度末現在)

廣袤三方里七九二にして沿岸線實に五里餘、市街は西より東に長く、商賈連櫓二里に亘り、其の突端鮫角に依りて灣形をなせり。

海猫(かもめ)の棲息地にして、天然記念物として保護せられ、全國的に其の名を知らるゝ蕪島は其の灣頭に位置して港灣を形成し、風光の美亦大いに拘すべきあり。

天下の景勝地たる種差海岸は、昭和十二年十二月二十一日内務省告示第四三二號を以て、名勝地として指定せられ、鮫角より以東一帯の海岸を含み、現代的景勝地として其の雄大絶佳の海岸美を推稱せらる。

八戸港は、大正八年十一月漁港として修築に着手し昭和七年度を以て完成、更に商港として同年十一月七日第一期計畫の修築に着手し、十二年度に於いて完成せり。去る十年二月十五日を以て第二種重要港灣として選定せらる。

滿洲大連港との航路は去る九年以來開始せられ、爾來、朝鮮、浦鹽との航運亦開け、移出貨物は頗る増加せるを

以て、保税倉庫を設立し税關吏員の駐在を見るに至り、出入船舶の頻繁と港灣利用の急激なる進展は、本州に於ては横濱以北に其の比を見ざるの躍進振りを示し、現に南港第一期修築工事を完成し、海陸連絡の設備稍整へたりと雖も、既に其の狹隘を訴ふるの盛況にありて、第二期擴張修築の急を認めらるゝに至り、仄聞する所に依れば第二種重要港灣として、内務省直轄の下に第二期修築計畫を決定せられあるを以て、其の實現近きにあり、開港又時の問題たるに想到する時、本港の將來は東北唯一の國際港として、東北の振興に一大使命を有すると共に、國家の福利増進の爲めに偉大なる貢獻をなすに至るべく、本市の前途は洋々たる希望の下に新興の機運横溢せるものあるを知るべし、茲に其の概況を述べて参考に資せんとす。

第一章 沿革

一、八戸港の沿革

本港は市の中央部に位置し、鯨角の突出に依りて自然の灣形をなし、東南一帯に丘陵を負ひ北西に展開す。藩制時代より八戸鯨港の名を以て、南、荻の濱港に次ぐ有数の港として知られ、舊南部領を其の勢力範圍に置き、物資集散の要津たり。然れども、其の港灣の不良は、年々歳々貴重人命と幾多の財産とを、水底の藻府たらしむる事一再ならざりしを以て、明治の初年、地方實業界の先覺者として知られたる、浦山太吉氏は、大いに之れを慨き、其の修築の必要を唱導して、要路に建築稟請、百方奔走の結果、明治十四年内務省より、工師佛國人ローエンホルストムルテン氏を派遣せられ之れが實測に着手せしめ、翌十五年之れを完成して築港の計畫を樹つるに至れり。

引續き浦山氏は熱心に其の實現に努力し、私財を投じて大いに奔走畫策する所ありしと雖も、時至らず、機熟せずして、遂に其の志を遂ぐるに至らざりしを遺憾とす。

爾來時移り星換りて、明治二十四年、東北鐵道の開通を見るに至つて、本港に依りて吞吐せられたる物資は、直接鐵道沿線に需給せらるゝに至り、海運又昔日の觀なく、僅に雄大絶佳の風景を有すると、海猫（かもめ）の棲殖所として其の名を止むるに過ぎざりき。

明治二十七年、八戸支線延長せられ、湊河口、對岸の地に現在の湊驛を設置せらるゝに及びて、中央都市との交通の便開け、茲に地方産業界に一大革新を促し、臨港鐵道としての利用頓に増加し、南は岩手縣九戸郡、下閉伊郡に涉り、北は尻屋岬以南の物資は悉く海運に依りて本港に集散せらるゝに至る。一面地の利を占むる本港の位置は南、金華山沖より北、襟裳岬に亘る天恵無盡の一大漁場を擁して、尤も近距離にあるの故を以て、漁業根據地として其の好適なるを認めらるゝと共に、漁獲物處理上中央市場との鐵道連絡の至便は、從來沿岸漁業をして遠洋に進展せしむるに至り、東北に於ける有数の漁港として知られ、漸く地方の衰勢を挽回するの機運に至れり。

第二章 漁港

一、漁港修築の經過

本港は前述の如く、交通機關の設備により、地方産業の進展を促し、年一年に其の發達を見るに至りしと雖も、憾むらくは、鯨港の錨地は、水深く好く大船巨船を容るゝに足るも、東北風に依る激浪を遮蔽するに、唯一の蕪島

あるのみにして、一朝、風濤に際して白浪港を壓して至り、怒濤時に岸に嘯んで港内全く船影を止めざるの慘事は一再にして止まらず、年々歳々貴重の人命と財産とを喪失せる、決して尠少にあらざりしなり。

僅に唯一の避難所として湊川のあるありと雖も、之れ又河心淺く大船を容るゝに足らず、辛うじて二十噸以内の小型船を收容し得るに過ぎざるを以て、空しく天與の資源を前にして、拱手其の開發に躊躇せざるを得ざるの情態にありて、遠洋漁業の發達、他に比して遅々たりしは、其の因又實に茲に存せるを以て、再び本港修築の急務は地方有志に依りて叫ばるゝに至れり。

明治四十年、時の本縣知事武田千代三郎氏又大いに本港の將來に囑目せられ、其の修築の基礎たるべき實測をなすと共に、海洋觀測を一ヶ年に涉りて實施せられ、翌四十一年農林省に於て漁港調査を開始せらるゝや、地方有志の懇請に依りて、技師關口四郎氏其の調査の筆頭に踏査せられ、茲に重要な漁港候補地として公認せらるゝに至れり。

大正六年十二月農林省に於て、初めて七年度豫算に漁港修築費國庫補助の端を開かれしは、地方有志具體的活動の動機となりて要路の間に奔走之れ努め、大正七年三月十二日を以て鮫灣漁港修築期成同盟會を組織し、同年四月七日、八戸町錦座に於て其の發會式を擧ぐ。之れより先、三月二十日時の本縣知事川村竹治氏には雨宮土木課長を隨へ、親しく本港の實際を踏査せられ、地方有志の陳情に聞き茲に最も記念すべき本港の漁港として修築すべき具體的企劃が樹てられ、同年六月二十八日を以て主務大臣に修築工事費百二十萬圓の二分の一國庫補助の件を稟申し同年十二月縣會の決議を経、大正八年六月二日及同年九月十一日の兩度に工事計畫を更正提出し、同年十月六日工費補助及工事施行の件聽許せられ、茲に地方多年の宿望を達するを得、大正八年十一月十日を以て、本港修築の起工式を盛大に舉行するに至れり。

當時に於ける計畫は、本港に於て尤も恐るべき、東北風に起因する激浪を防がん爲め、北八十度西の方向に蕪島突端を距る四十五間を起點とし、長三百間の防波堤を干潮時に於ける水深平均三十三尺の線に築造せんとするものにして、其の遮蔽面積は約百二十萬坪たり。更に北防波堤に依りて防止せられたる激浪の廻波及北西より正西の風向に依り起る波浪を防ぎ、且つ小型船舶の碇繋荷役に支障なからしむる爲め、北十度東の方向に埋立岸壁豫定地を離るゝ事七十間を基點とし、二百五十間の長を以て船入場防波堤を築造し、其の遮蔽面積五萬坪を得る計畫たり。經費は百二十萬圓にして其の二分の一、即ち六十萬圓を國庫の補助に仰ぎ、二分の一を縣費支辨として大正八年度より六ヶ年の間に竣功せしむる計畫たり。

然るに、豫定の工事中物價の騰貴と災害其の他に依る諸種の事情は、既定の計畫を遂行し能はざるに至りしが、地方有志の熱烈なる遂に萬難を排して時の縣知事遠藤柳作氏を動かし、大正十五年に至りて、八十萬圓の工費を追加して貳百萬圓に増加せるに拘らず、北防波堤に於て九十間を縮少し、西防波堤に於て九十五間を短縮せざるべからざるに至り現在の工程に改めらる。

其の後北防波堤の築設、工事の進捗に伴ひ其の効果著しく、年一年に安全錨地は擴大せられ、漁船の聚散又著しく増加の傾向となり、陸には久慈鐵道の敷設となり、灣頭に鮫驛を設置するに至りて、彌々漁港として必要なる要件を具備するに至り、茲に海陸連絡設備の不完全を痛感し、昭和三年に埋立工事を企劃せしが翌四年政變の結果、緊縮政策の下に一時中止の止むなきに至りしが、更に翌五年失業救済事業として之れを復活し、三度四十一萬圓を追加して、干潮時十二尺水深に埠頭岸壁を築設し、漁船の接岸荷役に便ならしめ、卜屋を建築して魚市場に充當す。總工費は前後を通じて貳百四十一萬圓、内國庫補助は壹百萬圓なり。

一、漁港の修築工事概要 (昭和七年度竣工)

一、北防波堤

本工事は北北西乃至北東より襲來する激浪を防止する爲め、蕪島西端を離るゝ四十五間の海上に起點を置き、北八十度西の方向に長二百十間を築造し、遮蔽面積約十五萬坪を有す。

築造個所の水深は、平均干潮面以下三十一尺乃至三十四尺にして、構造は捨石を以て基礎とし上に高、幅各二十四尺、長三十六尺の函塊(鐵筋混凝土けいそんぶろつく)を並列し、其の上に幅二十二尺厚三尺の場所詰混凝土を施し、上面の高平均干潮面上七尺とす、兩端は各長八間とし特別に大型とし其の西端には港燈を建設せり。

港燈の位置は、北緯四十度三十二分四秒、東經百四十一度三十三分十六秒(海圖第七十二號緯度十一秒加算)等級及燈質は、無等(三百耗燈籠)綠色不動にして、燈高は平均水面より燈火中心に至る十五米四、防波堤十二米七、光達距離は十二漚半、燭光數は九百五十なり。

二、船入場防波堤

北防波堤により、防止せられたる激浪の廻波及北西の風向に起因する波浪に對し、小型船舶の碇繋を安全にし且つ一般船舶の荷役上支障なからしめんが爲め、略陸岸に並行して長百五十七間を築設せり。

築造個所の水深は、平均干潮面以下十五尺乃至二十一尺にして、其の構造は北防波堤と同一様式とし、捨石基礎の上に高幅、各十二尺長三十六尺の函塊を並列し、上幅十尺厚二尺五寸の場所詰混凝土を施し、其の上面の高平均

干潮面上六尺五寸とし、其の北端六間は幅高共に大型に築造し、上に港燈を建設せり。

港燈は、無等(二百耗燈籠)赤色不動、燈の高水面より燈火中心迄十三米、防波堤より十尺にして、光達距離は十二漚、燭光は七百二十なり。

三、魚揚場

本工事は船入場防波堤により遮蔽せる海面に於て、略陸岸に並行せしめ、面積一萬七千九百餘坪を埋築し、其の海岸線延長三百三十二間の内長二百二十四間に亘りて埠頭岸壁を築造し、以て漁船の接岸荷役の便に供す。内長百八間は水際の水深を干潮面以下十二尺、長九十六間は干潮面以下十尺、長二十間は干潮面以下七尺とす。

埠頭岸壁に續き其の南端に漁船修理用船曳場長十六間を築造し、爾餘は海岸長九十二間には護岸工を施せり。

埋立地の高は、干潮面九尺より起り陸岸に向ひ百二十分の一上り勾配を附せり。

四、魚市場上屋

埋立地甲號岸壁に沿ひ、長九十五間、奥行十二間、一部二階建プラットラス型鐵骨構造、坪數千四十五坪の上屋を建設し、漁獲物處理機關たる魚市場に充當し、糶場、荷造場、積込場等を設け、階上には事務室、會議室、其他約二十室を設け、簡易食堂、娛樂場等必要なる施設に充當す。

五、臨時鐵道其他の施設

市場後方には臨港鐵道を敷設して鐵道省久八線鮫驛に連絡せしめ、道路、下水溝並に給水設備をなし、軌道を隔

て、魚市場の後方を製氷所、冷蔵庫、冷凍庫、貯氷所建設敷地に充當し、乙號岸壁を出漁準備に充當して漁獲物處理岸壁と區別し、之れに沿へる一帯の地を石油槽建設地等に充て、統制ある施設の下に漁獲物の處理並に出漁準備等一般漁業上に必要な施設に充て、其の殘餘の埋立地は各種倉庫、製造加工場等一般必要な用途に使用せしむる豫定なり。

一、漁港としての現在

一、外港漁港の盛況

本港は前述の如く大正八年を以て漁港として其の修築に着手し、爾來前後を通じて貳百四拾壹萬圓の總工費を以て既定の計畫を全く完成し、昭和八年七月二十八日盛大に其の落成の式を擧ぐるに至れり。

北防波堤の効果は實に偉大なるものありて、其の水深は僅に一萬噸級の汽船を安全に碇繋せしめ得べく、十五萬坪に渉る安全錨地は百餘の機船を優に收容碇繋せしむるに足り、埋立地岸壁は其の延長二百二十餘間に渉るを以て平均六十噸級の機船約五十隻を縦に碇繋するは又容易にして、近く商港埋立地竣工の際には船入湖は更に擴大せられ、安全なる碇繋水面と繋船岸壁は數倍するに至るべし。

海陸連絡の設備に至つては、魚揚場埠頭岸壁の完成に依りて漁船の接岸荷役は尤も至便にして、鐵骨一部二階建上屋は實に本邦に於ても尤も優秀なる施設にして、八年九月本市魚市場に充當し八戸魚市場株式會社に委託經營開市せしめ、漁獲物處理上に一段の至便を來せり、從來本港の尤も困難とせる給水設備も茲に完備し出漁準備に些の

遺憾なきを期するに至れり、又給油設備、製氷、冷凍の設備は着々として完成し、船揚場設備又竣工して船舶の修理修繕に些の遺憾なきに至り、漁港としての施設は順次完成せるを以て、各漁季に従つて漁船の聚散著しく増加し來り、東北唯一の漁港として南は金華山沖より、北は千島列島に渉る漁業の根據地として大いに利用せらるゝに至り、近時鹿兒島、宮崎、大分、高知等より鯖漁船の團體的出漁に依りて、本港を根據とせる遠洋漁業船現に貳百隻を算するに至り、之れに伴ふ冷凍、冷蔵機船の廻航又尠からず鯖漁季突棒（梶木漁）漁季たる夏秋の盛況實に股賑を極む。又、現在に於て既に我國に於ては隨一の烏賊漁場として知られ、鰯揚線網の機船二艘捲漁業と相俟つて八月以後の本港の盛觀に至つては、恐らくは天下に冠たるものあるべきを信するなり。

二、内港湊川の盛觀

湊川は年と共に小型漁船の増加に伴ひ、狹隘を告ぐるに至りしを以て、年々河心の浚渫を縣と市に於て施行し來れる結果、兩岸共に接岸荷役に便なるに至り、大いに其の利用を擴大せられ、河口の移動變遷に對しては、之を防止せんが爲め導流堤を築設し、護岸工事を施す等漸次其の改修に努めし結果は、河心の浚渫と相俟つて河口の水深又昔日の如く變動を來すなく、船舶の出入大いに至便を來し、近年烏賊漁季にありては常に五百隻以上の小型發動機船の輻輳を見るに至りしが、一昨年來一層の増加を來し盛漁期に至れば實に七百餘隻を算するの盛觀を呈せり。

如上の状況にあるを以て、湊橋より下流は全く漁船を以て埋め、其の狹隘を告ぐる甚だしきものあり、又河口出入船舶の雑沓を整理し、衝突の危険を防止する必要より、特に湊水上警察に於て河口明神社巖頭に信號所を設け之れが交通整理をなし、湊橋を架替へ航運の便を計り、碇繋區域を上流に擴張せるも尙且つ狹隘を告ぐるに至り、馬淵川改修の必要を痛感し着々其の實現に努めたる結果、昨十二年度より改修工事に着手せらる、今や鮫を外港と

して大型漁船の碇繋に充て、湊川を内港的施設の下に、小型漁船を收容せんとする理想も實現せられ、茲に兩々相俟つて益々其の利用も擴大するに至り、之れに伴ふ諸般の施設も、新興八戸市事業界當然の趨勢として、本港の修築完成と共に着々實現の機運にあるを以て、將來は獨り地方産業の發達に甚大なる効果を齎すのみならず、實に東北に於ける唯一の漁港として、斯界に貢獻する決して尠少にあるざるを深く信するものなり。
最近に於ける漁船の出入數並に其の水揚額を揚ぐれば左の如し。

三、在籍漁船數並に漁船入港數と水産製造加工高

一、本港在籍漁船數

發動機船	二十年	二十一年	二十二年
二十噸以上	二六	二五	二八
五噸以上二十噸未満	三四〇	三九五	四〇三
同	五噸以下	九	一一
同	計	三七五	四三三
			四四二
			五〇一

一、漁船入港數

區別	二十年	二十一年	二十二年
汽船	〇隻	〇噸	二隻
			一九四噸
			六隻
			一、三六二噸

發動機船	二十年	二十一年	二十二年
八四、六〇〇	一、四三八、二〇〇	八八、七七八	一、四七三、〇一一
計	八四、六〇〇	一、四三八、二〇〇	八八、七七八
			一、四七三、二〇五
			九一、五七七
			一、六二三、八〇五

一、漁獲物水揚高

沿岸漁獲物	二十年	二十一年	二十二年
九六一、二一〇圓	二、九三〇、六四二	一、七二三、五二四	
遠洋漁獲物	六六八、七四一	七〇六、〇六八	一、九六九、七二八
計	一、六二九、九五一	三、六三六、七一〇	三、六九三、二五二

一、水産製造加工高

二十年	二十一年	二十二年
三四七、七〇五圓	二、四六一、〇三七	一、三〇一、一二四

四、重要漁場との關係

黒潮と親潮との接觸點、之れ即ち好個の漁場にして、東北の一大漁場と稱せらるゝ金華山沖より、北は日高の襟裳岬に渉る一帶の海洋即ち之れなり。

黒潮の本流は、比律賓東岸より臺灣の東海岸を経て、琉球に沿ひ北上して鹿兒島高知の岸を洗ひ、伊豆沖より金華山沖を通過し、本縣沖に於て盛夏の候に親潮と衝突して東に折れ、遂に太平洋を横斷して再び南に歸る。

親潮は『カムチャツカ』東海岸『ベリリング』海より、千島列島に沿うて南下し、襟裳岬沖合より本縣沖を経て、秋冬の候には宮城、福島、茨城の沖合に及ぶ、又一方津輕海峽より來る日本海の潮流のあるありて、本縣太平洋面は實に三海流の錯綜點たり。

然も其の潮流の強弱に依りて、一進一退、其の位置必ずしも一定せず、若し黒潮の勢強大なる時は、金華山沖より沿岸近く流れ本縣沖合に於て親潮と津輕海峽より來る日本海々流たる暖流に會ひ襟裳岬沖にそれて千島列島の東南部を遠く東に轉回し、親潮は爲めに襟裳岬沖より潜流して南下するの狀態となる、又黒潮の勢薄弱にして親潮の流れ強き時は本縣沖合に於て日本海々流と親潮の爲めに沖合遠く阻まれ東に轉流し、親潮は黒潮と津輕海峽より來る暖流との間を南下して、岩手、宮城の沖合に及び潜入するものゝ如し、故に夏季に於ては黒潮の勢盛にして北進し爲めに暑く冬季に於て親潮が強流南下し來り爲めに寒冷なる所以にして其の強弱の差により其の一進一退は直ちに陸上の寒暑に變動を生ずるは勿論魚族の廻游狀態にも多大の影響を來すは明かなり、要するに東北海區に於ては鯨は黒潮の尖端を遊び、旗魚は之れに次ぎて沿岸流の抱和域近く廻游し、鮪は暖寒兩流の抱和域を廻游し、黒潮の北進に追はれて北上し、親潮の南下に従つて南に歸る、鱈は鮪に先立ちて沿岸流の抱和域を北上し鮪に遅れて南下し來る、烏賊は日本海々流の及ぶ所其の漁場なるか如し。

本港は暖寒兩流の一進一退、相接觸する海區の中央部に位置し、北進南下の廻游魚族往返の衝に當り、又深海棲魚の寒流帯の魚族豊富なる地域に接近しあるを以て、漁業根據地としては周年に涉りて絶好の地の利を占む。

左に各種漁業の漁場並に漁季を表示して參考に資す。

八戸港(鮫港)動力附漁業法

種別	主要漁獲物	漁期
捕鯨	鯨	自五月至十月
鮪延繩	鮪 鼠 鮫 梶木	自七月至十二月
鮪流網	鮪 鼠 鮫 梶木	自五月至七月
鼠鮫這繩	鼠 鮫 萬 鯛	自十一月至翌年七月
鯨釣	鯨	自七月末至十月上旬
突棒	梶木 海豚	自七月至九月
秋刀魚流網	秋刀魚	自九月至十一月
機船手繰網	鮮 鱒 目 拔 鱈 類	自十二月至翌年五月
目拔延繩	目 拔 魚	自十二月至翌年五月
小鮫刺網	魚 鮫	自十二月至翌年二月
柔魚釣	柔 魚	自八月至十二月
鱈揚繰網	鱈	自六月至十二月

五、交通機關並に重要都市との連絡

交通機關並に重要都市との連絡に至りては、東北本線尻内驛より分岐せる、八戸久慈線鐵道は本市を縦貫して、市内に五個の停車場を有す、曰く八戸驛、曰く湊驛、曰く陸奥湊驛、曰く鮫驛、曰く種差驛、以て其の交通運輸の至便を知るべし。然も湊川口に臨める湊驛、漁港埋立地に臨める鮫驛は、共に海陸連絡上尤も至便の位置にあるを

以て、鮮魚移出驛として知られ、現在に於ても、岩手縣宮古以北、本縣尻屋岬以南の鮮鹽干魚は悉く本港を經由し兩驛に依つて東北本線の各驛は勿論奥羽線、北陸線に亘る一帯の各都市に輸送せらるゝの情況にあるを以て、各縣遠洋漁船の年一年に漁季を追うて本港に集中し來り、漁獲物處理港として、將た漁業の根據地として東北に於ける唯一の連絡港として大に利用せらるゝに至れり。

今市内鮫驛を基點として、鮮魚需用地たる重要都市に至る哩數を擧ぐれば左の如し。

盛岡市	七五哩	青森市	六七哩	仙臺市	一八八哩
弘前市	九〇哩	福島市	二三七哩	秋田市	一八二哩
若松市	三〇四哩	山形市	二三〇哩	宇都宮市	三三九哩
新潟市	三六一哩	東京市	四一〇哩	金澤市	五三八哩
横濱市	四二六哩	京都市	七三四哩	静岡市	五二七哩
大阪市	七六一哩	名古屋市	六四二哩		

六、漁獲物處理機關

(イ) 魚市場

本市に於ける鮮魚問屋は、其の數二十有餘に上り、從來地元船のみを取扱ひ來りし關係上、各個に其の經營をなしつつありしが、漁港修築に伴ひ、各縣よりの廻船、年一年に増加し來る情勢に鑑み、舊慣を打破して取引機關を完全にし、相互の便益を計ると共に、信用を確實にし、圓滿なる取引を期する爲め昭和四年當業者結東の下に各自

出資をなし組合組織とし、湊川西岸の市有魚市場の經營を依囑せられ、湊川魚市場組合と稱し、委託販賣並に之に關聯する業務を營むを以て目的とし經營せられたりしが、更に漁港埋築地の上屋完成と共に從來の組合組織を株式組織に改め、資本金を充實し八戸市の委託を受け、昭和八年九月より八戸市魚市場經營の任に當れり。

一、株式會社八戸魚市場は、昭和四年八月湊川魚市場組合を組織し、湊川市場を經營、昭和七年三月資本金拾萬圓を以て株式會社に改め更に昭和八年九月漁港埋立地魚市場を經營す。

市場設備並に賣買規定

(イ) 湊川市場は一部二階建木造亜鉛板葺建物にして總坪數三一三坪を有す、曬場、荷造場、仲買賣場、附屬賣店事務所等に分ち二階を會議室に充當す。

(ロ) 臨港市場は八戸港(鮫港)埋立地岸壁に沿ひ建設せられ、長さ九十五間幅十二間、一部二階建、ブラットトラス型鐵筋建物にして總坪數千四百坪、内部は、市場事務所、荷揚場、曬場、荷造場、積込場等に分たれ場内には各仲買、船宿、冷蔵船宿等の事務所及船具漁具、油類其の他日用品の賣店(指定)等あり二階は事務室、會議室、應接室、船員休憩室、食堂、娛樂室等の設備を有す。

(ハ) 給水装置は市場内に簡易水道に依りて、漁船其の他に飲料水を供給するの設備あり。場内及魚類其の他の洗滌用水は、海水を自働式ポンプを以て屋上の水槽に自働的に貯水し、場内に水管を布設し、各所に放水場を設く。

(ニ) 賣買に關する事項

仲買人魚市場に於て買付をなすは、專屬仲買人のみに限られ、現在魚市場より指定せられあるは、五十九名にして、專屬仲買組合を組織す。

廻船問屋 當市場に於て廻船問屋を営むは、專屬廻船問屋のみに限定し、市場專屬廻船問屋組合を組織せしむ。仕切金の不拂等の場合は廻船取扱を停止し取引の安固を期す。

冷蔵船問屋 當市場に於て冷蔵船其の他の買付の代理行為をなすは、市場より指定せられたる專屬買付問屋に限られ、市場專屬買付問屋組合に加入せしむ。

販賣口銭及割戻並納付金

一、販賣口銭は賣揚高の百分の八とし左の割合に依る割戻金並に納付をなす

一、廻船問屋に對し賣揚高の百分の三

一、仲買人に對し買入金額の百分の一

一、仲買人に對する賣揚代金完納獎勵金百分の〇、五

一、市場使用料（市に對する納付金）賣揚高の百分の一

(ロ) 製氷冷蔵其の他の機關

一、株式會社八戸魚市場附屬製氷冷蔵工場概要

本製氷冷蔵工場は八戸港岸壁第三號地に位置し、昭和八年十月の建設にして、鮮魚、貝類、鹽干魚、其の他の受託冷凍並に冷蔵、保管をなし且つ製氷をなし之れを市場並に出漁船、冷蔵船等に供給す。

一、施設概要

- (1) 第一工場（製氷冷蔵庫）埋立第三號地建設、鐵筋コンクリート二階建、冷蔵室、冷凍室、準備室、製氷室
機械室、洗場等に分つ

建築坪數 建坪百四十三坪七合五勺延坪二百六十九坪

建設費 金拾五萬圓

冷蔵機械 アンモニヤ壓縮機〔冷蔵能力五十噸〕二臺
誘導電動機七十五馬力

内一臺を製氷に使用し三十噸製氷をなす

(2) 第二工場（貯氷冷蔵庫）埋立七號地建設

冷蔵室、貯氷室、準備室、機械室、氷出ホーム等に區分す

建築坪數 建坪 一五四坪 延坪 一八四坪

建設費 金五萬圓

冷蔵機械 アンモニヤ壓縮機〔冷蔵能力二十噸〕
誘導電動機二十馬力

外に八戸製氷冷蔵株式會社（製氷十五噸）三陸冷蔵株式會社八戸冷蔵庫並に八戸天然雜用氷貯藏組合等ありて、製氷、冷蔵、冷凍、貯氷を業とし一般の需用に應じつゝあり。

魚市場附屬冷蔵庫の製氷、年産額約九千噸、八戸製氷會社は約三千噸、八戸天然氷貯藏額約五千噸の供給能力を有するも、近く上水道完成の際には更に大規模の製氷冷蔵を見るに至るべし。

販賣價格は年中一定にして噸六圓五十錢を以て、漁港埋立岸壁に建設せるローアレーターを以て、直接漁船に碎氷を積み込む装置をなせり。

(ハ) 水産物加工機關

水産物加工機關としては、埋立地に八戸魚糧株式會社設立せられ、主に鱈のフェツシユミールを製造せり、現在

は日産六噸に過ぎざるも目下増産計畫中にあり、其他鱸詰、竹輪等に對しては青森縣水産試験場及青森縣漁民道場賓陽塾の研究と相俟つて年々に發達し、近海豊産の鱸は其の大小に依り煮干、田作、燻干、等に製造せられあるも、多くは漁期の關係上脂肪含有量多きを以て、主に肥料に製造せられ其の産額約百萬圓に上る。柔魚は交通の便なるより主に鮮魚として移出せらるゝも、近年干鰯に製造加工するに至れり、目下鮭鱈鱸詰工場、冷凍冷蔵庫の設立を計畫せられ、其の實績見るべきものあり。

(二) 漁船必需品供給關係並に船體修理機關

漁船必需品供給の便否は、漁業經濟上至大の影響あるは勿論なり、然るに本港は前各項に記述せる如く、交通運輸の至便に伴ひ商業地として夙に知らるゝ八戸市の中央部に位置し、湊町、小中野町とは連櫓相櫓比して舊八戸町に連り、商業上の機關は一として備はらざるなし、従つて漁業上必要なる物資に至つては遺憾なく需め得べく、現に石油タンクの如きは三ヶ所、埋立地に設置せられあるを以て其の一斑を知るべし。

船揚場は新たに埋立地に隣して建設せられ、船舶の曳揚装置をなし船舶の修理に便せしむ。
修理機關としては八戸鐵工機械工業組合及八戸木造船工業組合の外造船所は十九ヶ所、鐵工所は廿一ヶ所あり。
綿糸製網工場は一ヶ所あり、其の他漁具類、船具類、漁網等一切の漁業必需品の販賣店數軒を有す。

(ホ) 其の他の諸施設

一 通信機關は 市内に八戸、小中野、湊、鮫の郵便局を有し、八戸局は昨年四月一日より二等局に昇格し、電話交換局又新築なつて其の方式も共電式に改められ、鮫特設電話は市内に統一せられ、通信機關は全く一革新を來す

に至れり。

- 一 無線電信所は 水産試験場の所屬にして同所丘上にあり。
- 一 警報信號所は 八戸港の中央部に位置せる湊川口東岸の館鼻丘上に設置す。
- 一 水難救護所は 本市水産會の經營にして救護器具を設備し、信號所と共に館鼻丘上に設け看守員を常備して、湊河口出入の船舶に對して水先案内をなさしめあり、更に昭和十二年三月水難救護船蕪島丸（五十六馬力、二十八噸）を建造して漁業家の水難不安を一掃せしむ。
- 一 測候所は 國立にて昭和十一年湊川右岸の館鼻丘上に建設せられ、氣象觀潮の事業を開始せるを以て、一般漁業上の便益に多大なるものあり。
- 一 鮫角燈臺は 昭和十二年小舟渡平に建設せられ、十三年二月十六日より点燈を實施し、光達距離二十浬半に及ぶ。

一、漁港としての將來

漁港としての將來は、海陸連絡設備の完成と各種機關の整備に伴ひ、各縣漁船は海洋の利、交通の便を認識して一年一年に増加し來り本港を根據として北太平洋に活躍するに至り、南は金華山沖より北は千島列島に亘る一帶漁場の漁獲物處理港として利用せられある現状より見て、進んで北千島に於ける鮭、鱒の移入は勿論カムチャツカを中心とする、オコツク海ベールینگ海に亘る北洋漁業の連絡港として、各種工船の出入を見る決して速きにあらざるべく、函館、青森等の諸港に比し、距離に於て將た交通便利の點に於て漁獲物處理上優秀の位置にあるを以て將來

現在の埠頭岸壁狹隘を告げ、漁港第二期工事として埋立地と蕪島との間を適當に埋築をなし、埠頭岸壁を構築するの必要を生ずるに至るべきや瞭かなり。

現に鮭、鱈罐詰工場並に冷凍、冷蔵の設備をなし北洋漁獲物の處理を計畫せるあり、其の實現決して遠きにあらざるべく、數年後の將來は實に面目を一新するに至るべし。

亦内港湊川も既に狹隘を告げ、湊橋の架替に當りて特に漁船の航運に便ならしめ、上流をも利用するに至りしと雖も尙ほ且繫船に困難を來しあるを以て、一昨年馬淵川流域改修の必要を痛感し、内務省に申請して其の實測調査を了せるに、内務省亦治水改修工事の必要を認められ、十二年度豫算に貳百五十萬圓の工費を計上せられ、改修計畫を樹て、既に着工中に在り、之れが完成の際には河床の浚渫、河岸の整理を實施せらるゝに至るべく、従つて漁船の繫留區域は擴張せられ、其の利用は實に宏大なるものあるべし。

船揚場、網干場等亦漸次狹隘を告げつゝある今日、河口西岸の砂洲を護岸整理して斜面を構築し之に充當するの必要を認め目下其の實現を企圖しつゝあり、恐らくは數年後の馬淵川は全く面目を改むるに至るべし。

東北振興水産株式会社

本港は漁港として設備稍整ひ、商港として施設の漸次築造せられるあり、將來益々有望なるに鑑み昭和十二年六月東北振興水産株式會社の創立を見たり。本會社は八戸市を事業根據地として漁業其の他の水産業を營み、漁獲物の販賣、漁船漁具の貸付及漁獲物の加工、其の他之れ等に關聯せる諸事業を行ふ計畫を以て、本店を仙臺市勾當臺通り二十八番地に置き、支店を本市鮫町字上鮫字二子石字持越澤地先埋立地一號地に設く。第一期事業として二百五十馬力の漁船五隻(六一〇噸三九)を建造し、操業僅か三ヶ月六航海を以て實に七萬六千餘圓の驚異的收穫を得

たるは關係當事者努力の結果なるも亦本漁港の漁場範圍の廣汎なると、魚族の豊富なるを物語るものなるべし。

本會社にして第二期事業たる造船工場の設置、製造加工工場の建設、臨港鐵道の敷設、給水設備等を整へ、市場と後方連絡及販路の擴張を謀るに於ては、近時漸く躍進發達の緒にある本縣沖合遼洋漁業に貢獻する處あるべく、唯に當地方の爲めのみならず、所謂北日本の漁業開發上偉大なる効果を齎すや論を俟たざる所なり。

第三章 商 港

一、商港修築の經過

本港は前述の如く、漁港として修築せられたるに拘らず、其結果は港灣としての價值顯著なるものあり、交通的至便と相俟つて、漁業關係以外、海運に依る物資の聚散著しく増加し、昭和三年内務省指定港に編入せらるゝに至り、益々漁船以外の貨物汽船常に碇繋を斷たざるの状況に至りて、商港的に年一年に伸展し、昭和五年には其の移出の重なるはセメント、礦石等にて約十五萬噸、移入は石炭、木材約十四萬噸に上り年々増加の趨勢にありて、東北本線に尤も接近せる本港の利便と、東北に於ては鹽釜港、青森港の中間に位置せる關係より其の後方地域も亦各港間の鐵道路線の距離と便否とに準じて利用せらるべきは瞭かなるのみならず、特に本港の海運進展の上有利なるは地方に移出特産物を有する點にありて最も將來に望を囑せしと雖も、埋築中の岸壁は漁港として施設せられ、漁業關係専用にして之を一般商港的に充當し能はざるの憾みあり、僅に二三棧橋程度の設備を以て其の急に應じつゝあるも、海陸連絡の不利不便實に甚しきものあり。一面には一般産業の進展に伴ひ益々海運の必要を痛感し、其

の設備の急を訴ふるに至りて、港灣利用上當然に貨物集散を敏速に、船舶貨物の荷役上經濟的合理化を期するは必然の事業として施設せざるべからざるの機運に至れり、會々經濟界の不況は一般産業の不振を招來し、失業者の續出するの悲境に際會し、昭和五年度に於て失業救済事業として漁港埋立地南側に一萬七千餘坪の埋築をなし、水深千潮時十二尺より九尺の地域に亘り延長二百五十餘間の荷役岸壁を作り、物揚場を築設するの議を決し、將來商港施設の一階梯として埋立計畫を出願せり、之れ實に去る六年一月とす。

爾來其の實現に努力し其の進捗を計りしも、種々の事情より遅延せられ、幾多の曲折を経て昭和七年に及び、更に港灣協會に對して本港將來の擴張計畫の調査を依頼せるに、同年五月八日斯界の權威者たる安藝博士一行の本港調査委員に依りて實地を踏査せられたる結果、大いに本港の將來に囑目せられ、本市百年の大計とも云ふべき本港の修築計畫案を作製せられたり。

之れより先き四月の臨時帝國議會に於て本港に對し、産業振興事業として修築補助の議決せらるゝあり、直に港灣協會の調査計畫案に依り其の修築の實現を期せんが爲め、市營計畫の埋築事業の一切を併合して縣營修築の實現に努めしに、幸ひ同年八月の臨時縣會に於て六ヶ年計畫百二十五萬圓の工費を以て縣營修築が議決せられ、同年十月七日を以て起工式を舉行せらるゝに到れるは、實に吾人の欣快措く能はざる所なり。

工費負擔額は左の如し。

國庫補助額	五十三萬五千圓
縣負擔額	三十五萬七千五百圓
市負擔額	三十五萬七千五百圓

一、商港修築工事概要

港灣協會調査員に依て計畫せられたる八戸港修築計畫案概要中より之を抄録す。(昭和七年五月調査)

一、計畫の方針

八戸港は本邦太平洋沿岸中、南は金華山沖より北は北海道襟裳岬に亘る天恵豊當なる大漁場に對し好適の位置を占むるも、元來波浪に對する遮蔽に乏しく水陸連絡又頗る不便なりしを以て、港勢不振の状態にありしが大正八年以來施工中の漁港修築工事により、漁業者の不安を除き、漁獲物の陸揚及處置を敏速に且つ經濟になし得べきを以て、將來此地方に於ける漁業の發展期して俟つべきものあるべし。

前記修築工事は未だ竣功せざるを以て其の効果未だ顯著ならざるも、防波堤の完成により避難港として已に其の任務を遂行しつゝあり、現に昨冬の大暴風に際し本港に避難せる船舶は六百噸乃至三千噸級汽船三隻、又發動機船百餘隻を算し孰れも安全に碇泊するを得たりと云ふ。而して該工事了の曉は更に大型漁船に依る遠洋漁業の進展を促し、外來漁船の出入益々増加すべきを以て、漁港として本港第二期の擴張工事は、今日に於て之を豫定するの必要を認めざるべからず。

八戸港は商港としては殆ど原始的なり、然れども其の出入貨物は逐年増加し、昭和六年の輸出入貨物は三十餘萬噸に達せり、若し夫れ港灣に相當の改良を施して現代的施設を具備せしめ、又北海道東海岸諸港と一層親密なる交通を開始せしめ得るに於ては、本港は更に顯著なる發展を期待し得べし。

本港の現況を實地に調査し又將來を考慮し修築計畫の大體方針を左の如く定む。

- 一、現在の漁港埋立地と蕪島との間は將來漁港設備地の擴張に充つ。
- 二、南港の位置は之を漁港に接続し其の西方に設定す。
- 三、北防波堤を延長し港内遮蔽水面を擴大す。
- 四、本港は南港漁港の外避難港たるべき目的を有するを以て港内泊地の面積は成るべく之を廣くす。
- 五、港の沿岸は直に山地にして平地に乏しきを以て埋立地面積は成るべく之を廣くす。
- 六、埋立地と船入場防波堤との間の水面は漁船其の他小型船の専用にあつて充つ。
- 七、漁獲物を除外せる本港出入貨物將來の豫想額を約九十萬噸と推定し之を處理するに支障なからしむ、而して此等貨物の内、礫石、石炭等の大量貨物割合に多量なるべきを以て、成るべく岸壁荷役を多くするを以て利益とすべし、但し第一期計畫に於ては、差當り約四十五萬噸を取扱ふに適せしめ、少くとも三千噸級汽船一隻の接岸荷役場を設く。
- 八、前記大量貨物の取扱は成るべく經濟的ならしむる必要あるを以て、陸上設備を計畫するに當り此の點を考慮するを要す。

尙舊八戸港たる湊川は適當に之を改良し小型船の出入を便にし、其の利用を増進するを以て得策とすべし、即ち河口左岸には適當に防砂堤を施工し、右岸には大體三米水深線に達する曲線導水堤を築造し、以て流心を一定し土砂の沈澱を防止する外、河内には浚渫其の他適當なる改良工事を施行するの要あるべし。

二、計畫の說明

(イ) 北防波堤

現在の北防波堤を更に百五十米延長し、北東より襲來する激浪を阻みて新設すべき突堤を掩護し併せて安全なる泊地を増大せしむ。

(ロ) 浚渫及埋立

突堤西側は繫船岸壁前面其の他淺海部を所要の水深に浚渫し、船舶の出入碇繫に便ならしむ、而して之に依りて收得すべき約七十萬立方メートルの土砂を以て漁港埋立地南端より別紙圖面の如く面積十三萬七千平方メートルの埋立地を築造し、埋立高を干潮面上二・七米とす。

(ハ) 假防波堤

埋立地西端より北方に向ひ延長百二十米の假防波堤を突出し西風による波浪を防止して、物揚場及岸壁を庇護するのみならず、漂砂の侵入を阻止す。

(ニ) 繫船岸壁

突堤西側に水深七・三米延長百二十米の繫船岸壁を築造し三千噸級汽船一隻の接岸荷役に便せしむ。

(ホ) 物揚場

漁港に接する船溜の周圍五百四十米及假防波堤内側埋立地前面百七十米（折曲り十米を含む）合計七百十米は水

深干潮面下三米を有する物揚場となし、小型船舶其他の荷役に充つ。石炭、石灰石等の大量貨物は岸壁荷役を必要とするも、之れを第二期工事に譲り、差當り突堤東側の物揚場を此等大量貨物の荷役場に充て、其の後方に貯蔵所を設け適當に鐵道を配置す。

(へ) 假 護 岸

突堤端部百二十米及埋立地西側二百九十米合計四百十米は護岸となし、將來擴築の場合を慮りその構造は輕易のものならしむ。

(ト) 上 屋

差當り突堤岸壁沿ひに幅二十四米、長さ八十米の上屋兼倉庫一棟を設け、尙物揚場沿ひには必要に應じ適當なる上屋敷地を存せしむ。

(チ) 鐵 道 及 道 路

本線より分岐して突堤兩側及船溜東側物揚場沿ひに鐵道を引き込み、尙道路は幅十一米のものを縣道より分流して突堤内及各物揚場沿ひに至らしむ。

(リ) 荷 役 能 力

前記水深七・三米繫船岸壁の荷役能力を年額一米當り八百噸、物揚場の荷役能力を同じく五百噸と假定せば本計畫に依る岸壁及物揚場の一ヶ年荷役能力は約四十五萬噸に達せしめ得べし。

如上の計畫に依り工事を進め本年度に於て大體の工事を了り明年度には陸上施設を殘すのみなり。

一、商港としての現在

從來商港として修築せる港にして漁港的に利用せらるゝもの多しと雖も、漁港として修築せる港灣にして商港的に利用せらるゝは本港以外多く其の比を視ざる所、然も、漁港、商港、兩々相俟つて如斯進展を來し、港勢の如斯急激なる躍進を示せるは恐らくは稀に視る所なるべし。

之れ畢竟、海に於ては天恵の地の利を占め、陸に於ては交通便に依る者あるべしと雖も、漁港としての修築の効果の偉大なるは、實に其の利用を擴大するに至れる所以に外ならざるを知るべし。

昭和七年商港第一期工事を起せる當時は、其の移出入貨物は僅に三十萬噸程度に過ぎざりしを以て、其の修築計畫の如きも約四十五萬噸程度の貨物を取扱ふ施設として着工せしに、八年度には四十萬噸に上り、九年度に於ては五十萬噸、十年度には其の總額六十萬噸一千二百三十萬圓を突破し、十一年十二年度と累次増加を示すに至り、主要輸移出貨物たる硫化鉄礦二十萬二千七百餘噸、セメント十六萬四千八百餘噸の盛況にして、本年の如きは總額に於て僅に九十萬噸を突破するに至るべし。

現在は商港埋立地未完成の故を以て、海陸連絡の設備完からず、爲めに移輸出貨物多數を占め、移入の重なるは僅に石炭あるのみなるに拘らず、其の發着數量は修築計畫數量を突破して、將に其の倍額に達せんとするの港勢を示し、又、滿洲、朝鮮、浦鹽等に直通の船舶は、概して大型船多數を占め、港内は其度狹隘を感ずるに至れり。

第一期の修築工事完成して、海陸連絡の施設整ふに至らば、當然に移輸入の貨物激増すべく、一層港内の狹隘を

訴ふるに至るべきを以て、切に第二期擴張修築の實現を痛感する所なり。
 昨年、港灣協會、東北港灣振興調査員として貴族院議員堀切善次郎氏一行の親しく調査せらるゝあり、時の東北振興事務局長官にして現東北局長官松井春生氏一行又踏査せらるゝ等、要路の視察相次ぎ、益々本港の重要性を認識せらるゝに至りしは、實に欣快に堪へざる所にして、第二種重要港灣として、内務省又本港の擴張施設改善の急務を認められ、近き將來に於て内務省直轄の下に修築の實現亦期して待つべし。
 貿易の増進は又開港の機運を速かならしむるに至り、本市に於て特に保税倉庫を設定し、税關吏員の駐在を得て税關事務を處理しつゝあるの狀勢に依るも、第一期修築工事完成して商港的施設の整ふ際には、其の開港亦期して待つべく、時機の問題として大いに期待せられつゝあり。

一、本港船隻數並に曳船數及び其能率

種別	隻數	總噸數	一隻當噸數		
			最大	最小	平均
船	五三	二、六三〇	一〇〇噸	三〇噸	五〇噸弱
曳船	七	六九	一一噸	六噸	一〇噸弱

能率に於ては一日一千八百噸の荷役記録を有し、貨物船幅狭の場合と雖も千噸以上の荷役をなすの能率を有す。

一、入港船舶數

年度別	汽船		機關ヲ有スル帆船		合計	
	艘數	登簿噸數	艘數	登簿噸數	艘數	登簿噸數
十一年	三三七	四七二、八九六	一、五五三	三、四一	一、八八〇	二、〇二六、二三七
十二年	四〇六	四六二、一五二	一、六八三	二、四八	九四、二七九	二、一三七、八四〇

一、外國船入港數

船籍別	十一年度		十二年度	
	隻數	噸數	隻數	噸數
關東洲	一五	四五、三四〇	九	二五、五三〇
中華民國	一一	三四、五五四	一一	三八、九〇八
ソヴェート	二	八、九四一	六	一七、八一六
英國	二	六、三八二	七	一八、四三四
計	三一	九五、二一七	三四	一〇〇、六八八

一、移出入貨物數量價格

品種	數量	價格	仕向地
内地米	八三八噸	一六〇、八九六圓	岩手縣、北海道
小麥	二三	三、四〇四	同

品名	種	數	量	價	額	仕	出	地
鮮魚		九七八		一六六、三二四				漁船餌料、東京、大阪
酒		二一一		六六、四六五				岩手縣各港
魚油		一〇〇		一四、五〇〇				東京
硫化鐵礦		八八、二〇五		一、一四六、六六五				名古屋、清水、門司、三隅、室蘭、函館、興南
硫磺		三〇、八六〇		二、四七一、四七〇				大阪、知取、大泊、真岡、惠須取、野田寒、泊居、敷香、榮濱
石灰石		一九、八八〇		二七、八三二				野田寒、真岡、惠須取、泊居、函館
セメント		一三九、四一七		三、〇六四、七五四				岩手、新潟、宮城、東京、山形、富山、靜岡、愛知、北海道、樺太
其他		二二、六七六		一六六、一一〇				諸港
計		三〇三、一八八		八、七八五、三四六				
移入								
鹽魚		五〇九噸		四六、八二八圓				北海道、樺太
重油		三、五九九		一八七、一四八				船川、野内、鶴見、土崎、大船渡
石炭		一〇三、〇六〇		一、七五二、〇三〇				室蘭、釧路、小樽、岩内
過磷酸石灰		一、九九〇		九九、五〇〇				東京、横濱
木炭		八、三三五		一五〇、〇三〇				岩手縣各港
鮮魚		一三四、六九〇		三、二五五、九〇五				漁獲高
其他		二二、三六一		一、六七二、二三四				諸港
計		二七四、三六一		七、一六三、六六五				

第四章 第二種重要港灣としての八戸港

一、重要港灣に選定の理由

昭和十年二月十五日當八戸港は第二種重要港灣に選定せらる、其の理由に曰く

八戸港は、本州東海岸の最北部に位して北海道室蘭との最捷航路に當り、青森、宮古兩港の略中間に在り鯨岬角の突出に依りて灣形をなし、港内水深大なり。

本港は本邦屈指の漁港たると共に、又一面商港として伸展しつゝあり、現に防波堤並に導水堤、物揚場、上屋等の施設を有するも、最近出入の貨物は年々増加し、昭和八年に於ては四十萬噸、價格壹千百餘萬圓に及び、之等の設備を以てしては、到底此の港勢に應ずること能はず、乃ち青森縣は商港施設の充實を計るべく、昭和七年度より防波堤の延長、岸壁及物揚場等の築造に着手し目下施行中に屬す、而して之が完成の際は港の面目を一新すべしと雖も、港勢に順應せしめんが爲には尙諸施設の改良を要するもの尠なからず。

本港の後方地域と認むべきものは青森、岩手縣内二市六郡に亘り、此總面積約八千八百平方料に及び奥入瀬、五戸、馬淵、久慈、北上等諸川の流るゝありて、其の流域は大小の盆地をなす、人口五十萬に及び八戸、盛岡等は其の主要都市たり。交通機關としては國有鐵道東北本線等五線の外地方鐵道二線あり、國道、府縣道等と共に各樞要地に通ず、各種産業亦年と共に旺にして其の年生産額三千四百七十餘萬圓に達し就中、農産物、工産物は其の主要なるものとす、而して此の背後地産業の發展を企圖する一に本港の活躍に俟つべきものあるを覺ゆ、其の將來や實に多端と謂ふべし。

以上の如く各種情勢を検討し更に其の大なる使命に想到するときは、愈々本港の重要性を感じざるを得ず、而も現在他の重要港灣に比し遜色なし、是本港を第二種重要港灣に選定せんとする所以なり。

如斯本港は國家の重要港灣として認められ、尙現在計畫の施設を以ては港勢に順應するに足らずとして將來の施設改良を認め更に其の大なる使命の存するを認めらる、本港の前途は洋々として希望の輝くものあるを知るべし。

二、本港の優越せる事項

一 泊地の水深 本港は北防波堤を以て東北の風波を防ぎ安全錨地を構成し、堤長二百十間に依りて水面積約十五萬坪を遮蔽せり、内船入場防波堤百五十七間により遮蔽せらるゝ二萬一千坪を除き、水深二十尺以上三十四尺に亘る抱擁水面積は約十三萬坪にして、現に一萬噸級の巨船を碇繋せしめ得べし。

目下修築中の商港北防波堤八十餘間の延長（前記北防波堤を延長せるもの）は本年を以て大體完成の域に達すべきを以て、其の抱擁面積は更に擴大するのみならず益々港内錨地を安全ならしめ、第二期工事擴張の際には六千噸級乃至一萬噸級の巨船を接岸荷役せしめ得べき計畫なり。

重要港との水深比較

港名	横濱	神戸	大阪	名古屋	小樽	釧路	室蘭	鹽釜	八戸
水深	一二米	一二米	一〇米	九米	八・五米	九米	九米	六・五米	九米

一 水深と築堤 本港の水深は自然の儘の水深にして、一回も浚深せざるは修築港灣中稀に見る所にして、全く漂砂の憂なきのみならず、却て潮流の關係上水深を高めつゝあるの觀あり。

之れ一に築港當初に於て周密なる調査研究の下に地方實際家の意見に聞き、三度其の設計を變更して、地形と潮流とに適應せる計畫よりなれる結果にして、一文字式の北防波堤、其の起點を工事容易なる蕪島に置かず、特に海上四十五間の距離に据ゑたるは尤も注目すべき所にして、沿岸に沿うて西より東に流れ来る潮流を四十五間の水道に依りて外海に導けるは、各地の築港に於て累をなしつゝある漂砂の憂を全然除き得たる所以にして、當時農林省囑託たりし斯界の權威者として知られたる、故近藤寅太郎博士並に農林省技師關口四郎氏の裁斷に依りて決定せられたるは、築港上稀なる成功にして全く吾人の期待の誤らざりしは實に欣快に堪へざる所にして、本港の發達と共に永久に記念せらるべき事蹟たり。

若し夫れ將來本港の水深を必要とするに當り、之を十米乃至十二米に浚深するは容易にして、必要に應じて充分其の水深を保ち得べきを信ず。

一 港口 又廣潤にして全く水先案内を要せずして如何なる巨船も海圖に依りて自由に出入し得べく航海に取りては尤も安全なる港たり。

一 錨地 又港内一帯に砂、砂交り粘土にして錨掛り尤も良好なり。

一 降雪と荷役 東北と言へば、言はずして雪國と感じ降雪の多量なるを思はしめ従つて冬季の荷役の如きは必ず不便にして且つ不可能の場合も想像せらる、然るに當八戸市は、實に東北に於ける桃源にして、冬季降雪寡なく屋外の勞役に従事し得ざるが如きは稀に、又港内に於ける荷役其の他の作業に於て降雪、又は吹雪の爲め支障を來すが如きは稀にして、青森港其他とは全く比較すべくもあらず、故に冬季と雖も荷役の如きは何等平時と變りなく従事するを得るは、東北諸港中稀に見る優越せる點たり。

一 外港と内港 現在修築中の舊鰹港を外港として貨物船、大型漁船の碇繋荷役に充當し、湊川を内港として小型漁

船並に運送帆船の繋留に充て、兩々相俟つて港態益々進展し、年々移出入貨物に於て十萬噸宛を増加しつゝあり。若し夫れ本年度を以て現在着工中の約四萬坪の埋立地完成し三千噸級の船座岸壁利用せらるゝに至らば、臨港引込線と相俟つて貨物荷役の便は著しく増加し、上屋、倉庫等の建設に依つて移入貨物噸に増加すべく全く面目を一新するに至るべし。

内港たる湊川は其の河口干潮時六尺の水深を保ち其利用せらるゝ流域は河幅は約五十間、上流へ約三百間、小型發動機の繋留は五百隻を算するに至り全く狹隘を告ぐるに至れるを以て、過年湊橋の架替に當りて横脚を高めて船舶の通航に差支なからしめ、以て繋船區域を擴張せるも、更に河口に於て合流せる馬淵川流域に繋船岸壁、船揚場の築設をなし河心を浚渫して將來は河岸一帯を工業地帯に充當すべく都市計畫に豫定せり。

三、商港第二期修築計畫並に將來の擴張と其の水面積

一將來の擴張 本港は北防波堤を、燕島を去る四十五間の海上に基點を据ゑ、西へ一文字に築造せるを以て其の擴張は容易にして、現に漁港として築設せる二百十間の防波堤に、更に商港施設として百五十米を延長築造せるを以て約三百間の長堤たり。

商港第二期計畫は港灣圖に赤線を以て示せる如く、昭和十一年十二月内務省土木會議に於て決定せられ、北防波堤を更に六百米築造して安全錨地を擴大し、同時に第一期計畫に於ける突堤を現在の西防波堤に沿ひ延長し、西側には三千噸級汽船二隻の船座を設け東側なる漁港西防波堤を改築して物揚場として利用し、更に西側假防波堤を第二期突堤に改築突出せしめ、其の東側に岸壁を築造し六千噸乃至一萬噸級汽船二隻の船座を設くる計畫にして、昭和十三年度に於て實現の豫定なりしが時局の影響を受け、止なく延期せらるゝに至りしと雖、近き將來に於て必ず實現すべく其の暇には裕に約百萬噸以上の貨物を取扱ふを得べし。

尙將來擴張を要する場合には、北防波堤を西へと延長するのみにて安全錨地を二倍乃至三倍にも擴大し得べく、繋船岸壁も亦第二期計畫に準じて其の西方に順次埋立をなし突堤を櫛形に構成し、更に湊川東岸の導流堤を延長して河流の港内流入と西方より來る廻潮の漂砂を防止して港内の水深を保たしむると共に、西防波堤として適當に延長する時は一大港灣を形成するに至り、又北防波堤を適當の間隔を置き延長築造して港口を設くる時は、本州に於ては稀に見る優秀なる一大港灣を築設し得るに至るべし。

本港の水面積は左記の如く廣大なる面積と水深とを有するを以て、其の實現は決して夢想にあらざるべく、東北に於て特種の使命を有する港灣として矚目せらるゝ所以亦故なきにあらざるべし。

水面積			
深 度	面 積	深 度	面 積
〇——五	六四四、九〇五平米	五——一〇	六四六、九五二平米
一〇——一五	一、〇二六、六九七	一一——二〇	一、四八五、七三〇
二〇——二五	一、二六六、〇六一	二一——三〇	一、二三七、六〇二
三〇——三五	一、一六三、二八五	三一——四〇	六七三、七七二
四〇——四五	三七八、五四九	四一——五〇	一七一、五六五
五〇——五五	七三、七〇三	五一——六〇	二四、七七二

計

八、七八三、六〇〇平米

内五尺深度より蕪島面積二八、八〇〇平米を除く

第五章 工業港と其の實現

漁港より一轉して商港施設に進展せる八戸港は、更に工業港の實現に躍進しつゝあり、現に既設の磐城セメント株式會社は湊川上流に其の工業所を設け、豊富なる石灰石を有して盛大に之を經營しつゝあり、今又馬淵川右岸の地を下し

日東化學工業株式會社は資本金貳千萬圓を以て、敷地七萬坪を買収して着々工場建設中にして、堂々たる工場の一部倉庫の建並べる既に偉觀を呈せり、原料は硫化鐵礦を地方に仰ぐの外、大量原料は琉球北大東島より移入しアルミナ並に肥料其の他の製造に着手するの計畫たり、又東北興業會社は燃料國策としての

無水アルコール工場を馬淵川上流八戸驛附近に建設すべく、既に敷地貳萬坪餘を買収せるを以て、本年秋季には其の實現を見るに至るべく

砂鉄工業は本市沿岸より約二十里に亘る海濱一帯に埋藏せらるゝ砂鉄を採取し、日本砂鉄工業株式會社に於て其の豊富なる礦區に着目して、既に現地上北郡百石町沿海地帯に採礦を開始し、近く本市附近適當の地を下し馬淵川を利用して其の事業を開始すべく準備中にあり、其他二三企業計畫中のものは何れも東北振興電氣の供給を仰ぐ關係より、同發電計畫の完成を期待しあるを以て振興電氣豫定の送電實現の際には馬淵、新井田兩川流域に沿へる平原地は工業地帯として利用せらるゝは、將に時の問題たるの觀あるを以て數年後の工業的進展は、實に眼覺しきも

のあるを信ず。

是等の工場は偏しく港灣を利用して其の製品の輸移出より、原料燃料の移入を目的として河川の利用と相俟つて運輸の便なるに重きを置き、馬淵河畔に工場を選定せるを以て各種工業の進展と共に、其の運用地域の擴大せらるゝに従ひ、既定商港の狹隘を感じるや明なるを以て湊河口以西に於て下長苗代海岸を埋立て、更に獨立せる工業港の施設を必要とするの時期決して遠きにあらざるべく、大八戸港の將來を遠觀する時は今日に於て一大計畫を樹立して、百年の計をなす必要なるを痛感す。

第六章 本港の後方地帯と産業

一、本港の後方地域

現在は南に鹽釜港あり、北に青森港あり、裏日本には船川港、酒田港のあるありて、其の勢力範圍も鐵道交通上其の距離の遠近に依りて自ら定まる者あるべし、従つて其の後方地域として當八戸港の勢力範圍に屬すべきは

一、北は東北本線の乙供驛を鐵路の距離より見て青森港と其の勢力の分岐點と見做し、其主要驛並に主たる町村を擧ぐれば

沼崎驛、古間木驛、下田驛、尻内驛

上北郡七戸町、三本木町、百石町、十和田村、三戸郡各町村

等なるも物資に依りては野邊地驛は勿論下北郡一圓に及ぶ者あるべく、殊に海運に依る六ヶ所村、東通村は現に本港の勢力範圍にあり。

一、南は黒澤尻驛を以て鹽釜港との勢力の限界として見るを得べし、其の主要驛を擧ぐれば
 黒澤尻驛、花巻驛、盛岡驛、好摩驛、沼宮内驛、一戸驛、北福岡驛等の各驛にして、之等各驛を中心とする附近の町村は當然後方地域たり。

一、好摩、花輪線、花輪、大館線を中心とせる秋田縣鹿角郡は舊藩時代より密接なる關係にありて、從來本市の勢力範圍たりしが、奥羽線の開通に依りて一時通商中絶の姿なりしも、道路の開墾改修等に依りて交通又舊に復するに至り、花輪線大更驛より移出の松尾礦山の硫化鐵礦並に硫黄は、本港經由輸移出年額三十萬噸に及ぶの情勢にあり、日々本漁港に聚散する鮮魚は鐵道若くはトラック便に依りて花輪、大館を經由し秋田市、土崎港等に移出せらるゝ者亦尠からず。

一、八戸、久慈線は其の名の如く本市より分岐して岩手縣九戸郡久慈町に至る海岸鐵道にして本港の勢力範圍にあるは言ふ迄もなく、九戸郡と下閉伊郡の一部は鐵道と海運とに依りて本市商權内にあるを知るべし。

一、更に本港の急激なる進展は地方産業開發振興の中心地として目せらるゝに至り、秋田、岩手の隣接縣亦本港を中心として、交通機關の整備を唱導し、當該官廳に對し關係市町村長並に有志は、極力鐵道敷設の請願に陳情に努め其の實現を期しつゝあるを以て、秋田縣花巻線毛内驛に連絡の青秋横斷鐵道にして實施せらるゝに至らば、秋田縣鹿角郡の開發は勿論、裏日本と表日本との本州北部の連絡は最も捷徑となり、産業的に貢獻する、必ずや大なるものあるべし。亦、岩手縣東部の九戸郡一帯は現在交通機關の圏外にありて其開發遅々たるものあるに鑑み、本港より九戸郡輕米町伊保内村葛巻村等の十ヶ町村を經由し東北本線宮古内線に沿ふ路線、即ち青岩振興鐵道の實現を極力運動しあるを以て、實現の際には舊藩時代より産金地として知られたるの地、其の埋藏せられある金、銀、滿俺、石炭、砂鐵、其他の天然資源は當然に本港の利用に依りて開發せらるゝに至るべし。

二、後方地域に於ける主なる産業

☒セメント

セメントは本市湊町に製造工場を有する磐城セメント株式會社の製産にして、十二年度に於ける産額並に發送額は左の如し。

仕向地	數量	金額	
内地各縣	二二七、九八一噸	五、二三五、五八二圓	
右の内	陸上輸送	九八、六七四	二、一七〇、八二八
	海上輸送	一三九、三〇七	三、〇六四、七五四
海上輸送の内	北海道、樺太	四四、六〇五	九八一、三一〇
	東京府外各縣	九四、七〇二	二、〇八三、四四四
外國輸出	四七、四三五	四八〇、二二二	
右の内	途中積換輸出	四七、二〇〇	四七六、二〇〇
	直接輸出	一、二三五	三、五〇二

發送先	陸送	海運
輸出	東北六縣各驛	樺太、北海道、青森、岩手、宮城、山形、富山、東京、靜岡、愛知、露西亞、グアム島、カムチャツカ、北樺太

☒ 硫化鐵礦 硫黃

現在本港經由の硫化鐵礦は若手縣若手郡松尾赤川山國有林内(花輪線大更驛より十五、六杆)松尾礦山の産出にして、品質優良なるは全國に定評あり。

硫化鐵礦を原石の儘本港經由輸送する數量並に仕向地

滿洲化學工業株式會社 (大連) 一〇二、四三〇噸

朝鮮興南化學肥料會社 (興南) 七八、六八五

南滿洲鐵道株式會社 (營口) 一一、一五〇

精練硫黃の輸出數並に仕向地

輸送先は本港經由樺太方面の各製紙會社 約一五、〇〇〇噸

大阪、神戸、其他關東北陸北海道方面 約一六、〇〇〇噸

現在神戸港、青森港經由にて南洋、支那、朝鮮、濠洲に輸出せられ將來本港を經由すべき數量 約一五、〇〇〇噸

一、硫化鐵礦は 松尾礦山以外本縣内には豊富に埋藏せられ、上北郡天間林村所産の礦石は最も有望なる礦區として目せられ、乙供驛を距る約八里、營林署軌道を利用するの便あり、本年其の採掘を開始し好成績を得て大規模に事業を計畫し、製鍊所をも建設の見込にして尼ヶ崎化學肥料會社と某礦業所の共同經營なり。

將來硫安肥料製造亦大に注目せらる。

本郡上郷村、猿邊村等亦同礦の埋藏地として囑目せらる、將來交通の便開かるゝに至らば其の開発を見るに至る

☒ 罐詰工業

從來捕鯨事業の開始に伴ひ罐詰事業亦發達せしも、規模狭少にして地方産の魚介類果物類の加工に過ぎざるも北千島地方との通漁的連絡は鮭鱒罐詰に着目するに至り、東北興業會社關係の東北振興水産會社は漁撈の外、罐詰事業に着手すべく目下準備中であり、現に日本水産會社は冷凍冷蔵倉庫を建設中であり、近き將來に於て工場經營の端緒を見るを得べし。

又本市に豊産の鱈を加工する者一、二なきにあらざるも規模小なるを以て、トマトサーजन、オイルサージンの製造に着目せるあり、同罐詰工場の設定亦近く實現するに至るべし。

☒ 魚糧製造加工

八戸魚糧製造株式會社は鱈を原料としフエツシユミルを製造し、日産六噸の製造能力を有するも今や其の設備の狭少を認め、目下新式壓搾製造に依りて脂肪、水分を去り漸次乾燥製粉加工をなすの装置をなしつゝあり、今後は大いに面目を改め優良なる製品を多量に産出するに至るべし。

☒ 油脂工場

鱈の産額年々壹百萬圓を算する本港を中心として、南には三陸沿岸、北には北海道東海岸を控へ、鱈小鯨等の油脂加工は最も有望視せらる、將來電動力の供給圓滿なるに至らば、滿洲大豆の搾取と併せて本工業の企畫實現を見るに至るべし。

酒

本市に於ける醸造業は急激に進展し、醸造方法の研究改善、優良杜氏の養成に努力し其の操作設備又完備し、各地に於ける品評會、共進會、博覽會等に於て多數の優賞を得、東北地方屈指の銘釀地として其の名漸く現はるゝに至る、重なる仕向地は縣内の外岩手縣、北海道、東京市を主とす、將來最も有望視せらる。

年産額 七、〇〇七石 五十七萬六千八百三十一圓

油

當業者不斷の研究努力に依り醸造法頗る進歩し其色澤、香味共に先進銘釀地の壘を壓するに至り、年々移出數量を増加し、北海道、岩手、秋田、山形、宮城等に販路を有す。

年産額 九、〇〇〇石 二十二萬二千三百六十圓

桐木工品

本市は南部桐の本場として其の名全國的に知られ、良質を以て誇りとす、製品の種類は下駄木取甲良、仕上下駄、筆筒、飯櫃、盆、琴材、苘セット、火鉢其他の家具類を主とし、東海道、關西、山陽、山陰の各鐵道沿線、遠くは九州、臺灣、朝鮮に及び、北は北海道、樺太に及ぶ。

年産額 三千五百施 價格 四十萬圓

△馬鈴薯、麥類、大豆、木炭、養豚、産馬等地方の特産物尠なからざるも之を略す。

第七章 將來の八戸港

一、本港の將來と其の使命

交通上より見たる後方地域並に其の勢力範圍は、前述の如く大體に於て推定し得べきも、將來關係各港の發展に依る其の勢力の擴張は、恐らくは之を以て率し難きものあるべく、其の變化は今日に於て豫想し難き者あるを深く信するものなり。

惟ふに東北の港灣にして現在一萬噸級の巨船を碇泊し得べきは、青森港以外稀に見る所にして、將來之等の巨船に對し接岸荷役の施設をなし得るは、恐らくは本縣の兩港以外には之を求むる能はざるべし。

殊に本港の他の港灣に比して最も優越せるは、實に多量の輸出貨物たる硫化鐵礦とセメントを基礎的貨物として有せる點にして、港灣の利用と海運の上にて最も有利なる條件を具備し、大連航路の如きも現在其の復航には空船にて廻航し來るが如きは最も不利なるは勿論なるを以て、近く竣工する埋立地に海陸連絡施設完成するに至らば滿洲特産の大豆粕、撫順炭、大豆、硫安肥料等は比較的低廉なる運賃を以て輸入し得べきを以て、東北六縣に中継配給せらるゝに至るや瞭かなり。

又朝鮮航路は現に興南に毎月二回乃至三回の運航をなしつつあるも、朝鮮郵船等にて計畫の雄基、羅津、清津等より本州一周の航路を開始せらるゝに至らば、新潟、函館を経て横濱、神戸に周航の中間たる東北にありては、本港は最も便宜の位置にあるを以て、必ずや寄港地として實現するに至るべく、滿蒙開發と共に將來米國航路の開始

せらるゝに至らば、津輕海峽通過の船舶は必ずや本港を以て本州に於ける第一の寄港地となすに至るべきは、地理的に見て決して空想にあらざるを知るべし。

現にクリンカーの北米輸出の端は將に開けんとせるあり、濠洲輸出の硫黄は時期の問題たるに顧みて、將來東北に於ける唯一の輸出港として、國際港として絶大なる使命を有するに至るべきを以て、本港の開港は將に時期の問題として期待し得べく、殊に太平洋問題のかまびしき非常時たるに鑑み、第二種重要港灣として選定せられたる理由中の「更に其の大なる使命に想到するとき愈々本港の重要性を感じざるを得ず」との一節と、往年世界一周飛行機の最初の米、英、飛行機の何れも本邦に於ける最初の着水地は、本港内湊町海岸たりしを思ひ合せて、國家の重要港灣としての使命の重大なるを知るに足るべし。

如斯重大なる使命を有する本港の現在の修築施設に對しては「其の完成の曉には其の面目を一新すべしと雖も、港勢に順應せしめるには尙諸施設の改良を要するもの尠ならず」と斷じ、將來第二種重要港灣として國家的施設の必要を指示し、十二年度豫算に第二期修築計畫を樹てられたりしも、時局の關係より止なく延期せられたりと雖近く實現を視るに至るべきを以て、如何に本港の前途に赫々たる光明と、洋々たる希望の輝けるを物語るものあるを知るべし。

一、東北振興と本港の修築

由來東北の地は本邦の西部に比して文化大いに遅れ、其の産業的開發亦遅々として振はざるものあるは、其の基因一ならざるべしと雖も、恐らくは交通機關たる鐵道、港灣の不備は其の一大原因にあらざるなきか……殊に東北

に於ける港灣の缺乏は、全く我國に於ける海運圏外に立たしめ、僅かに一基の軌道に其の交通を托せる結果は、其の開發振興の上に多大の影響を及ぼし、文化は却而一足飛に東北の地を越え、北海道に輸入せられしの感ある亦故なきにあらざるなり。

然も北海道の今日あるは國家的殖産事業として、特種の施設に依れるは勿論なるべしと雖も、若し本州との連絡港としての函館、日本海に面せる小樽港、太平洋に面して室蘭、釧路等の諸港を有せざるに於ては、豈に今日の北海道あるを得べきや否や。

惟ふに我が國に於ける都市の多くは、舊藩制時代に於ける所謂御城下都市にして、因襲に依る歴史的階力に依りて僅に其の面目を保ち、行政に、軍事に、教育に關係を有する官公署等公營物の設置に依りて、其の地方に於ける中心的都市の名を維持するに過ぎざるの觀あるも、産業的に新興都市として、商港都市として、益々其の隆盛を稱せらるゝは悉く臨港都市若しくは其の附近に優良なる港灣を有せる事實に鑑み、港灣に依る交通運輸機關の完備は如何に地方を産業的に發展せしめ、其の開發の原動力たるやは推して知るべきなり。

憾むらくは我が東北に於ては、臨港都市として一も見るべきなく、僅に北海道連絡港として、一青森港を有するのみなるに顧みて、其の振興の遅々として進まざる、又故なきにあらざるを痛感せざるを得ざるなり。

幸に本港は地の利と與へられたる海洋の利は、實に得易からざる天恵にして、本港修築の結果は、東北に於ては稀に見るの良港灣を形成するに至り、其の利用亦一年に擴大せられ、各種工業勃然として起り、地方産業に貢獻する所益々大なるに至り、今や本港を中心として交通整備の必要を一般に痛感せしむるに至り、秋田縣關係者は青秋横斷鐵道を、岩手縣關係町村に於ては青岩振興鐵道の敷設を請願、極力其の實現に努め本縣上北、下北沿岸各町村に於ては東海岸の改修を陳情する等、一に本港の利用に依つて其の開發を企圖せるに外ならざるなり、現に第二

種重要港灣として第二期修築目前に迫り、近くは開港地として實際港の列に連なる又時期の問題たるに想到する時は、本港の使命重且つ大なる、唯に東北振興の爲めのみならず、實に國家興隆の重責は、又本港の大使命たるを深く痛感するに至るべし。

(代略寫) 昭和十三年八月稿を改む

神 田 重 雄

昭和十二年の八戸地方氣象概要

氣温を見ると八戸は八月の二十三度九より一月の氷点下一度九に在り、平均氣温九度三で、盛岡の九度二、青森の九度一に比すると八戸が最も暖く、夏季は逆に青森が八戸や盛岡よりも高温となつて居り、今數字を比較して見れば一月、八戸氷点下一度九、青森氷点下二度六、盛岡氷点下二度四となつて居るが八月、八戸二十三度九、青森二十四度一で、八戸は青森より冬季は暖かく夏季は涼しい。

日照に於ては昭和十二年夏では東北地方一様に良好であつた割に五月と七月が寡なかつた、冬季に於ては各地特有の状態を示し十一、十二、一、二、三月の五ヶ月間の日照は次の如くであつて

八戸四二% 盛岡三八% 秋田一九% 青森二五% 酒田二三%

盛岡や秋田等に比較して、北の八戸はずつと日照があることを示して居る。

事實八戸では冬期間雪國特有な陰鬱な曇天は寡ないのであつて、一年を通じて快晴の日數を見ると

八戸三三 福島二一 山形二三 水澤一七 盛岡三一 酒田二三 秋田一九 青森二〇

となつて居り、しかも十二月の如きは福島が二日、山形と盛岡が各一日、其他水澤、酒田、青森と全部快晴なしと云ふ状態なのに八戸では四日となつて居る。

降雪の状態は一般に八戸地方が青森に比較して寡ないと云ふことは知れて居るが、どれ位異なるかと云ふ量的に東北二三の個所と比較して見ると

今冬(昭和十二年——十三年の最深積雪)(cm)

八戸地方氣象略表

	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十一 月	十二 月	
平均氣壓(水点)	760.5	760.1	756.7	760.9	754.8	757.4	757.4	757.3	758.4	760.9	760.2	755.4	758.1
平均氣壓(海面)	762.9	762.5	759.1	763.3	757.1	759.6	756.9	759.5	760.4	763.2	762.5	757.8	760.4
平均氣温	-1.9	-0.7	0.6	7.2	11.5	15.1	22.4	23.9	17.6	11.6	6.2	-1.5	9.3
平均最高氣温	2.1	3.6	4.9	12.9	16.5	19.9	27.2	29.0	22.7	17.9	11.1	2.4	14.2
平均最低氣温	-5.1	-4.7	-3.3	2.1	7.4	10.8	19.0	20.4	13.6	6.7	2.0	-4.9	5.3
較差	7.2	8.3	8.2	10.8	9.1	9.1	8.1	8.6	9.2	11.2	9.1	7.4	8.9
最高氣温ノ極起日	12.1	11.7	12.4	23.5	24.7	25.3	33.2	33.7	29.4	24.0	18.8	11.1	33.7
最低氣温ノ極起日	-9.9	-9.1	-9.5	-1.9	3.4	3.7	14.3	16.1	6.4	0.8	-2.3	-10.1	-10.1
最大日較差日	13.2	15.1	17.0	21.1	19.8	12.8	13.8	13.9	15.5	18.3	15.2	11.2	21.1
水蒸氣張力	2.8	3.3	3.5	5.2	7.5	10.6	17.2	18.1	12.3	8.0	5.5	3.2	8.1
濕度	70.8	74.4	71.9	68.3	75.1	83.2	85.7	82.6	82.4	78.6	75.7	76.2	77.1
濕度ノ最小	30	40	41	32	43	43	54	41	42	41	42	47	30
雲量	6.3	7.1	6.9	6.3	6.8	5.6	7.9	6.3	6.5	4.9	6.5	5.8	6.4
降水量	68.4	118.4	69.2	71.0	92.4	53.3	141.1	120.2	198.2	60.8	96.4	47.4	1136.8
一時間最大量	4.5	7.9	3.1	3.8	5.0	4.4	18.0	23.9	18.1	7.2	19.3	4.0	23.9
最大風速ノ方向	16.1	21.5	16.7	13.8	16.8	9.7	7.0	9.3	14.0	14.6	14.4	25.9	25.9
暴風日數(10-15)	W	NNE	SW	W	WSW	ENE	E	NW	E	WSW	W	NE	NE
(15-29)	8 2	6 3	9 4	12 /	4 3	/ /	/ /	/ /	3 /	1 /	6 /	9 3	5 5
平均風向	S74W	S68W	S64W	S47W	S38W	S14E	S40W	S23W	S18W	S33W	S52W	S63W	S50W
日照時數	123.7	124.9	169.8	211.0	169.3	255.9	145.6	204.6	174.0	171.6	116.7	115.7	1983.0
全上%	42	42	46	53	38	57	32	48	47	50	39	40	45
降水日數 ≥ 0.1	9	17	16	13	16	13	15	17	16	12	12	17	173
" ≥ 1.0	6	7	6	9	12	6	11	11	10	7	7	8	100
雪	21	19	18	2	0	0	0	0	0	0	7	21	88
快晴日數	2	0	3	1	2	2	0	3	3	10	3	4	33
曇天日數	11	12	16	8	9	9	14	9	11	17	13	9	128
不照日數	3	6	5	3	5	4	2	1	6	3	3	7	48
霜日數	4	3	6	9	0	0	0	0	0	5	11	15	53
有感地震回數	5	2	1	2	6	5	7	2	3	1	3	8	45

即ち以上の表でも明瞭の通り、昭和十二年の十二月から十三年の四月迄八戸が他の何れの都市よりも積雪は寡少で、特に三月、四月を除いては他都市の二分の一以下の積雪で、特に青森に比較しては其の三分の一以下にしか當らないと言ふ様な状態である。

地名	月別	十二月	一月	二月	三月	四月
秋田		一六、〇	四五、七	六七、〇	四五、五	1
盛岡		三六、五	四八、七	七六、五	四四、〇	1
青森		七六、七	一一八、〇	一四〇、三	一一一、八	一一、〇
八戸		七、八	一九、三	二八、〇	三一、一	1

昭和十三年九月十一日印刷
昭和十三年九月十三日發行
(非賣品)

八 戶 港 大 觀

八 戶 市 役 所

編輯兼
發行人 神 田 重 雄

八 戶 市 長 橫 町 二

印刷人 北 村 泰 助

八 戶 市 長 橫 町 二

印刷所 八 戶 印 刷 株 式 會 社

發行所 八 戶 市 役 所